

長沼の由来

《長沼》

長沼町の地名の起こりは、その昔、石背国造建弥依米命がこの地に来て、大蛇鼻師などの賊を撃ち、田を墾して、この地を治めた。この頃、東西に長い沼があったので、「長沼」と呼んだという。のちに会沼、阿曾沼ともいった。西の山の突端に、人の形に似た巨岩があったので、人神、人上、と呼んで靈地とした。

沼のほとりには、大きな藤の木があり、美しい花が咲いているので、ここに郷土創生の神として、木花開耶姫命を祀ったという。これが藤沼神社で、のちに江花の地に移ったのだという。人神石は石背石とも呼び、現在のはげご石である。

この沼に一つの物語がある。村に一人の獵師がいて、常時禽獸を獲ることを業としていた。ある時、沼に行つて一羽のおしどりを射殺して帰った。また次の日行つて、残りの一羽のおしどりを射殺した。見ると、前の日に射殺したおしどりの首を、羽の間に抱いていた。このおしどりの精靈が、忽然と美しい女の姿となって現れ、声をあげて一首の和歌を詠んだ。

小夜更けて寝なましものを長沼の

真菰隠れに獨り寝ぞうき

と操り返し、高々と詠んでその姿は消えた。

獵師も、さすがに驚いてしまった。「ああ、あやまつたり、おしどりとは男女の情愛深きもの、かか